Weekly Bulletin Vol.69 No.42　2024–2025 ＲＩ会長 ステファニーA. アーチック 泉大津ロータリークラブ（創立1956.5.4）

週報 第3293回

会　長　渡辺　万寿　　**副会長**　瀧谷　達
幹　事　根尾　玲子　　**ＳＡＡ**　中田　広宣

例会場　ホテルレイクアルスターアルザ泉大津
ＴＥＬ　0725-20-1121
例会日時　毎週金曜日12：30〜13：30

事務局　〒595-0062 泉大津市田中町10-7 泉大津商工会議所3Ｆ
TEL.0725-21-9500　FAX.0725-21-9501
メールアドレス　info@izumiotsu-rc.org
ホームページ　http://izumiotsu-rc.org

今週の例会（2025年6月6日）　第3293回

■ プログラム

クラブアッセンブリー
各奉仕部門担当理事

■ 次週のプログラム

6月13日：　卓話担当　小野寺　巧　会員

■ 今後の予定

・6月20日：「一年を振り返って」
会長・幹事・SAA

■ 祝　誕生日

松内　俊夫（１１日）

■ 今月のロータリーソング

奉仕の理想

今月の歌

かたつむり

でんでん虫々　　かたつむり
お前の頭は　　どこにある
角だせ　　槍だせ　　頭だせ

■ 先週の例会

会長の時間　　渡辺　万寿　会長

放浪の五年間

悲しい気持ちで大学の勉強をつづけながら、祖母の葬儀の知らせを待ったり、幼い頃のいろいろな情景や出来事を思い出したりしていて、私は、同年代の者ならばほとんど感じたことがなかったであろうような郷愁を感じていた。私には、自分の育った谷あいにある静かできちんとしたあの家や、祖父母の愛に満ちた心づかいがなつかしかった。私は、ヴァーモント州の山々を夢にまで見た。だから、遂に西部の山々が見えて来た時、目に涙がわき出て来た。

ふるさとの山がなつかしい
雄大な　我が母なる丘よ
恋しさがこみあげてくる
何物も　慰めになりはしない
―　ブリス・カーマン　―

1年前、法律勉強のためアイオワに行く途中、ヴァーモント州の村から来た少年は、シカゴに1週間滞在した。この雑踏した、不正と不安に満ちた西部の街は、不思議な魅力で少年をとらえた。それは、少年の育ったヴァーモントの谷間の村とは全く違ったところであった。でもその中に少年は、ある生命力を感じとったのである。そこは人々の生き方が学べるところであった。人が自然に集まってくる場所というものがあるのだろうか。もしあるとしたら、その人たちを引きつけているものは何だろう。人の生き方を左右する目に見えない動機は何なのか。なぜ善人もあれば悪人もあるのか。どうして人のために犠牲を払う人があるのか。それでも彼らは報われているのか。報われているとしたら、どのようにしてなのか。また、なぜおのれの肉体的精神的道徳的な能力を無駄づかいする人がいるのか。その人たちはぜいたくをして何を得たのか。祖父の与えてくれた教えは賢明であったのか、それとも祖父は、善意の人ではあるが、わからずやで時代遅れの人間であったのか。

アイオワでの最初の1年間、デ・モインにあるセントジョン・スティヴンソン・ホイズナンド法律事務所で、法律の勉強をした。しかし夏が来るとオカボジャ湖畔に行き、釣りをしたりして野外生活を楽しみ、さしあたりやりたいことがなくなると、法律の本を読むのであった。

この年の秋私はアイオワ州立大学の法学部に入学、1891年6月にそこを卒業した。
この大学にいる間、彼は生まれてこのかた出会ったことがない全く違った状態を経験したのである。ここの学生達は、ヴァーモント大学やプリンストン大学の学生達よりも年長であった。ほとんどがアイオワの農家の出で、学業の完成に必要な経費を得るために、学校の教師をしていた者が多かった。皆まじめで、たいてい遊びの時代は卒業してしまっていた。雰囲気は健全そのもので、学生たちは互いに問題を出しあったり、法律上の理論や実際問題について論じるなどして、夜まで教室に残っていることがしばしばであった。

筆者は今、いろいろな教育機関での自分の体験を振り返って見て、それから一体何を得たのかと自問してみる。そこには一体、祖父の払ってくれた犠牲や希望に報いるどんなものがあったのか。学生生活を送ったことに何らかの価値があったのだろうか。筆者の、教育機関での経験から得られた最善のものは、他の学生とのふれあいから生まれたものであった。学問上では、おそらく、いろいろな国々の著者による良書に愛着を感じたということ以外に、多くのことを得たなどと、とても言う資格はないであろう。

アイオワ大学でも生活の終り近くになって、少年はあるひとつのことに深い関心を持つようになっていた。それは人々の生き方を知ることであった。まず自分の国のいろいろな人々の生き方を知りたい、そして次に他の国々の人々の生き方をも見たいのであった。しかしこの目的が達成できるであろうか。心の奥底では、それが気狂いじみた冒険であることが、少年にもわかっていた。世間一般の慣習を破るとしたら、それは重大なことだ。級友たちは皆健全で常識的である。誰もが、卒業してふた月もたたぬうちに、自分の選んだ町で弁護士業を始めるだろう。自分もそうしなければ、故郷の村の人達は、あいつは気が狂ったのかと思うだろう、と少年は迷うのであった。

そんな時に、彼の信念を元気づけてくれる出来事が起った。卒業記念行事の講演の中で、弁護士を開業している10年前に同じ大学を出た先輩が、「卒業生がみな、まずどこか小さな町に行って5年間ぶらぶらしてみるのが賢明なやり方だ。その後で自分の選んだ都市に行って開業すればよい。」と言ったのである。

この先輩の話が、少年の心の迷いをすっかり解決してくれた。これからの5年間、小さな地域にとどまるのではなく、世界中のどこにでも行って、やりたいことをやってみよう。なんとすばらしい経験であろうか。やりたい放題のことをやってから、どこか大きな都市で、おそらくシカゴになるだろうが、弁護士の看板をあげて、そこに落ち着こう、と彼は思ったのである。そこで少年は無駄足を始め、決して一度も後を振り返らなかった。自分の国や外国の人たちに対する関心がこんなに強いのだから、なんとか最後までやり遂げられる、といつも思いつづけていたのである。

民族によってなぜこうも大きく生活様式が違うのであろうか。彼は大学の図書館で、イギリス・フランス・ドイツ、そして又ロシヤ、北欧諸国の色々な作家の著書を多く読んだが、好奇心がなおさら強まるばかりであった。実際に外国に行って見る以外にそこに住む人々の生き方を知りたいという彼の望みを満足させることはできないであろう。

この野心を達成するために、少年は、肉体労働精神労働の如何を問わず、どんな仕事でもやらなければならなかった。山の中を何百マイルも歩いたし、大都会の通りをとぼとぼと歩きもした。だだっぴろい原っぱで寝たこともあれば、町の安宿に泊ったこともあった。また時にはずっと食事抜きで通したこともあった。何度も何度も彼は自分の育った谷あいの村と、祖父母の家でのやすらぎを思い出した。空腹の時彼が一番よく思い出して心やすらいだものは何であったろう。それは、バターや楓糖を塗ったそば粉のケーキでもなく、ハムエッグでもなく、またニューイングランド特産のポーク・ビーンズでもなかった。そんなものは、幼年時代の中で最も思い出すことの少ないものであった。せつなく思い出すものといえば、それは祖母が作ってくれた、ただの、リズ・ドーナツであった。時々、異郷で病気になると、彼の脳裏を去来するものは、祖母の入れてくれる紫蘇茶(しそちゃ)とか、冷えきった足を暖める温浴などの、祖母の優しい心遣いなのであった。

僅かな貯えでも残っている間は、北西部での狩りや釣り

ですばらしい休暇を過ごすことが出来たが、サンフランシスコに着いて間もなく持ち金は尽きてしまった。とうとう独力で暮らさなければならなくなったのである。ド・ヤング氏所有の新聞社サンフランシスコ・クロニクルに勤務中の大学時代の友人の世話で、アルバイトの記者に採用されたが、きびしい時代で、競争も激しかった。クロニクル紙の、彼と同じ新米記者の一人に、ルイスヴィル出身のハリー・プリアムがいたが、この男は後にナショナルリーグの会長になった人物である。

ハリーとポールは親しい仲となり、一緒に働きながらカリフォルニア中をめぐり歩くことにした。それから3日目には、二人はヴァーカー谷にある果樹園で肉体労働に従事していた。そこで一稼ぎした後、カラヴェラスの大きな木々を後にして、トレイルレス山地を越える３００マイルの旅に出た。今でこそ有名になったが当時はあまり知られていなかったヨセミテ渓谷も探訪してみた。続いてカリフォルニア州フレズノにある乾ぶどう工場の作業員となった。こうして遂にロサンゼルスに辿りつき、ここでポールはロサンゼルス商科大学の講師となった。

カリフォルニア州に9カ月いたあと、ポールはコロラド州デンヴァーに移り、オールド・フィフティーンス劇場の専属劇団で舞台俳優をやって多芸ぶりを示した。この新しい体験は思っていた以上に好評を博した。なつかしい友人たちの中には、ポールが邪道におちたと確信して手紙をよこす者が何人もいた。彼はパイク山頂への登山を試みて、グリーン山脈で鍛えシェラネヴァダ山脈でも試してみた彼の健脚が、ロッキー山脈でも通用する確信を得た。彼はロッキーマウンテンニュース紙の記者となり、しばらくそこにとどまった。次に、プラットヴィルの近くの牧場でカウボーイの生活をする機会に恵まれ、ひとりで迷い牛を探し求めて何日間も牧場を駆けまわることが何度もあった。その後再びデンヴァーに戻ってリパブリカン紙で働き、そこで東部に戻って来ていたサンフランシスコ時代の記者仲間の何人かと再会した。

フロリダ州も、ポールを魅惑する夢のある土地であった。幸運にも鉄道パスの恩恵を受けて彼はジャクソンヴィルで下車し、当時その土地で最高の観光ホテルであったセント・ジェームズの夜勤事務員になった。ホテルの仕事が単調だったのですぐにそこをやめ、大理石花崗岩売買を営むジョージ・クラークの会社で、フロリダ一帯を歩く出張販売員となった。この仕事には、以前ヴァーモントのシェルドン大理石会社で働いた経験があるので、多少の知識があったのである。このジョージ・クラークという人物は、放浪者ポールの一生に大きな影響を与えた人であった。経営者ジョージ・クラークと社員ポールは、まもなく肝胆（かんたん）相照らす仲となる。ずっと後になって、このジョージがジャクソンヴィル・ロータリークラブを創立し、初代会長になるのである。

１８９３年3月、ポールは米国大統領グローヴァー・クリーヴランドの就任式を見るためにワシントンに向かった。首都滞在中、彼はワシントン・スター紙に臨時の職を得た。そこから彼はルイスヴィルに向かった。そこにハリー・プリアムが戻って来ているので、クリアー紙かコマーシャル紙に職を世話してくれることを期待していたのである。しかしこの期待は当てがはずれポールは別の大理石会社に勤め、ケンタッキー、テネシー、ジョージア、ヴァージニア州一帯を旅する機会を得た。

ヴァージニア州ノーフォークに着くとすぐこの職を退き、ポールはフィラデルフィアに向かう船に乗った。ラグビー校のトム・ブラウンを初めて読んであこがれた時から、ディケンズ、サッカレー、スコットといった文豪のとりこになった時期を通じて、ポールは英国諸島をひとめ見たいものとあこがれていた。そのためならば、どんなにつらいことも耐えるつもりであった。フィラデルフィアの新聞の募集広告欄で、彼は、英国に牛を送るために或るボルチモアの牧場が牛飼いを募集しているのを知った。翌日の夜明け前、船は出航したが、この船には人生体験から何かを得ようと願うこの若者ポールが乗船しているのであった。それは実に辛い航海であった。船上での窮乏と苦しみとは、信じられない程のものであった。食事なども、とても食べ物といえるようなものではなかった。船員たちの中にも牛飼いたちの中にも、考えられないほど堕落した下劣な連中がひしめき合い、ポールにとっては極めて苦しい経験であった。

リヴァプールとその郊外しか見られずに、ポールは同じ航路の他の船で帰らなければならなかった。残念だったのはロンドンが見られなかったことで、この英国の首都を訪れるためにはあのつらい船旅に耐えてもう一度来ようと決心するのであった。帰りの航海はそれほどひどいものではなかったが、牛飼いにはマットレスも毛布も食器もあたらないといったありさまであった。主な食事といえば、時々小さな肉片が入っているだけで、あとは芋と水だけのいわゆる船員食と、かびくさい堅いパンなのであった。船内は不潔で、虫がわいていたし、冷たい海水の波をかぶることも度々であった。

ボルチモアでもっとましな船を待つ間に、ポールはエリコットの町まで行って、ある乾草畑で肉体労働をする機会を見つけた。これは彼には重労働であった。彼は全力をつくしたが、まかないつき下宿と引き替えに農家の雑用にまわされた。次にとうもろこしの缶詰工場で日給1ドル５０セントをもらった。この仕事をしている間に、うれしいことに前回よりもよい航路の牛の運搬船が出航することがわかった。ボルチモアに戻ってポールは、ミシガン丸という船の副職長の職を得たが、この船はロンドンから３０マイルのところにある、テムズ河畔のティルバリー港が目的地であった。なんとうれしかったことであろう。

ポールと、船で知りあった友人とは、まもなくロンドンの街

を、国会議事堂や歴史や小説に出てくる有名な場所を見ながら歩いていた。しかし彼等が泊れるところは、せいぜいホワイトチャペル地区にある安宿であった。でもそこは、このヴァーモントから来た社会学者の卵には、特別に興味のある場所であった。帰りは荷物を積み込むために船がスワンシーを経由したので、この機会にポールはウェールズ地方を少々見て歩く事ができた。

米国に帰るとポールはすぐ汽車に乗って、シカゴで開かれた１８９３年万国博覧会を訪れた。この美しい米国博覧会での楽しみは、彼の放浪生活のたのしい幕間であった。そこで彼は、この魅力ある都市シカゴの将来性への確信が持てたのである。彼の持ち金は汽車賃分だけであとは無一文であったので、博覧会場で働いていた大学時代の友人を見つけ、その家に泊めてもらった。ある日ヴァーモント館に入ると、驚いたことにいとこであるラトランドのフォックス家のエドとマティーが、展示品を丹念に見ているのを見かけた。ポールはすぐにくるりと踵を返して会場を出た。無一文のこの若者は、親戚の者に自分の姿をさらけ出す気にはなれなかったのである。

アメリカの全土のうちある一つの都市が、彼の心を奪っていた。それはニューオーリンズであった。ニューオーリンズはアメリカの他の都市とはいろいろな意味で違っていたからである。どうしたらニューオーリンズに行けるかが問題であった。この辺で触れておきたいが、放浪生活中ポールはどんな時でも無賃乗車をしたことはなかった。汽車賃をきちんと現金で払うか、それとも汽車賃代わりに労務を提供して乗せてもらい、いつも荷物を持って旅をしたのである。彼はいつでも、生活費を稼ぐためならどんな仕事でも喜んで引き受け、決して骨惜しみをしたことはなかった。人に充分尽くせなかった時でも、それは肉体的精神的限界によるもので、不熱心さのためではなかったのである。借りたお金はいつも確実に返済する人であった。

シカゴにいる大学時代の友人に金を借りて、ポールはニューオーリンズに出かけた。そこに滞在中彼は、プラクマイン教区でオレンジを摘み箱詰作業をする１２人の人夫募集の広告を見つけた。その翌日、ポールを含む一団の男たちはミシシッピー河を渡り、この父なる川の河口からさほど遠くないデルタ地帯にあるピザッチ氏のオレンジ林と倉庫とに向かう途についていた。オレンジ摘み、箱詰め、荷造り、発送といった仕事は、数日間は順調に進んだ。ところが突然嵐が吹き荒れ始めた。その嵐はハリケーンとなり、高波が押し寄せて来たのである。ポールとオレンジ摘み仲間とは、暗闇の中を自分等の家から唯一の安全な場所ピザッチ氏の倉庫へと、女子供をつれ渦巻く水の中を歩いたり泳いだりして渡って行った。それから斧やバールを持出して、水が川に流れるように堤防を切り崩すのに全力をふりしぼった。嵐が静まった時には、堤防の上は馬、牛、豚、にわとりや小鳥の死骸でいっぱいであった。１８９３年のこの海岸地方を襲った嵐は、数百の人命を奪い、財産の損害は甚大なものであった。それから何年もの月日が過ぎたにも拘らず、あの出来事の恐ろしさと被害とは今もなお人々の記憶に残っているのである。

ポールはニューオーリンズに戻り、新聞社で職を得ようと努力したが果たせなかった。この歴史ある都市には見るべく、学ぶべきことが多かったが、旅人ポールはこの頃には少々弱気になっていた。彼の気持ちは、フロリダにいる友人の心からの親切なもてなしの方へと向いていたのであった。

ポールが以前ついていたジャクソンヴィルの大理石会社の職はまだ空いており、そこに彼は戻った。ジョージ・クラークは、まだポールが旅したことのない地方に行かせてくれた。ポールが任されたのは南部の諸州とキューバとバハマ諸島であった。ジャクソンヴィルのクラークの家をポールは時々訪れたが、これが二人にとってはまことに機の熟した時であって、経営者とその社員とは大の仲よしになったのであった。それから１年後、ポールはジョージに退職の意向を申し出た。ジョージが「行って見たいと思うところは他にないのか」と訊ねると、ポールは「行って見たいところが一つあるが、そこは行かせてもらえそうもないところだから」と答えた。「そこはどこなんだい？」とジョージ。「ヨーロッパの国々です」とポール。２週間後、放浪者ポールは仲よしの社長の出張命令によってスコットランドの花崗岩産地やアイルランド、ベルギー、イタリアの大理石産地などで原石買付の為に再び、海外への旅に出かけたのだった。

私は、大英帝国、アイルランド、フランス、スイス、イタリア、オーストリア、ドイツ、ベルギー、それにオランダで過ごしたすばらしい日々を忘れることはできない。

イタリアのカララに住むマクファーランドの家を訪れた時は、見知らぬ人々から思いもよらぬ親切を受けた。なかでもマクファーランド夫妻は、彼がヨーロッパ大陸旅行の旅程を延ばせるようぜひ資金を提供しようと申し出てくれた。彼はその好意を受け、後にこれを返済した。

米国に戻るとすぐ、放浪者ポールはジョージ・クラークを助けて、ジャクソンヴィルの近くで土地の分譲や建設計画に尽力し数カ月間暮らしたが、次に目を北の都市シカゴへと向けた。ジョージは彼にジャクソンヴィルに残ってくれないかと慰留した。

「シカゴに定住するとどんな利益があるか知らないが、君が私のところにとどまってくれれば、シカゴへ行く以上によい収入が得られると思うんだが。」するとポールは答えた。

「おっしゃる通りでしょうが、私は金もうけのためにシカゴに行くのではない、自分の生活をするために行くのです。」

ポールはニューヨークをほとんど知らなかったので、シカゴに落ち着く前に、この東部の中心都市を少しは知りたいと思った。ジョージはまた友情を示してくれ、ニューヨーク

支店長をジャクソンヴィルに呼び戻し、一時的にポールにニューヨーク支店を担当させてくれた。
　ジョージ・クラークよ。君はなんてすばらしい、寛大な、真の友人であったことか。

幹事報告　　根尾　玲子　幹事

○来月6月からクールビズとなりますので、よろしくお願い致します。
○来週6月6日（金）夕方から、新旧理事役員会を開催予定でございます。関係者の方はご予定どうぞよろしくお願い致します。

委員会報告

○地域社会奉仕委員会から連絡です。6月1日（日）の港湾美化清掃よろしくお願い致します。集合場所は、小松緑道広場（円形公園）に8時にお願い致します。参加して頂ける方に紙をお配りしております。泉大津市の方からSNSのごみ拾いアプリのピリカに出来たら登録してほしいということです。当日雨天の場合は、6時30分に私の方に連絡が入りますので、その後皆さんに連絡させて頂きます。雨の場合は中止となっております。よろしくお願い致します。
（櫻井 善章 社会奉仕委員長）
○本日、家庭集会を行います。場所は泉大津市のシーパスパーク内のGARBです。18時30分からですのでよろしくお願い致します。
（松村 泰英 会員増強・クラブ研修委員長）
○本日例会終了後、みやびの間におきまして第5回委員会を開催致しますので、ご出席のほどよろしくお願い致します。（松内 俊夫 70周年実行副委員長）

■ ビジター

なし

■ 出席報告　　会員数43名　出席免除1名

月日	出席数	欠席	補充	出席率
5/30	33名	10名	—	76.74%
5/18	27名	16名	6名	76.74%

■ メークアップ

榎本（5/20 ワールド大阪ロータリーEクラブ）
南出、岡本、臼谷（5/30 家庭集会）
中田、瀧谷（5/9 理事役員会）

■ ニコニコ箱

・西田会員、本日は宜しくお願い致します（渡辺）
・住友様、本日はようこそお越し頂き有難うございます。楽しんで頂きましたら有り難いです。西田会員、本日の卓話を宜しくお願いします（根尾）
・住友様、お越し頂きありがとうございます。本日卓話西田様、よろしくお願いします（中田）
・本日は西田会員様、卓話宜しくお願い致します（松内）
・親睦活動委員の皆様、家族例会ではお世話になりました（八木（秀））
・例会欠席のおわび（小野寺）

ニコニコ箱合計	19，000円
累計	861,500円

先週のプログラム　「職業と奉仕、そして思うこと」

卓話担当　西田　佳郎　会員

今回のテーマは「職業と奉仕、、そして思うこと」です。
今回ロータリーの職業と奉仕ということで、会社の方では、以前は繊維製品の毛布や敷パットといった寝装製品を製造しておりました。そして、途中で倉庫賃貸業を始めました。倉庫賃貸業といっても以前から毛布を備蓄していた建物を、倉庫として転用しただけの話です。
そして、昨年からレンタカー事業をはじめました。業務

レンタカー泉大津店といいまして、フランチャイズとして一店舗を運営しております。今年で二年目となります。中古の軽自動車を購入し、それを企業や個人のお客様にお貸しする業務となります。まだまだ認知度がなく、これからといったところです。仕事は特に貸出車が返却されれば、異常がないかの確認と結構こまめなお掃除をすることが日常業務になってきます。

奉仕についてちょっと恥ずかしいお話なんですが、ロータリーに入るかなり以前に、20歳、30歳代に奉仕って何だろうて考えたことがありました。

その時は、奉仕とは自ら進んで行動することが大切だと考えていました。

でも、自ら進んで行動することの重要性って、なかなかピンとこないので、喫茶店でコーヒーを飲みながら考えていると、ふと小さなことを思いつきました。

この喫茶店で、トイレに行くふりをして、トイレ掃除をしてやろうと思いつきました。

洗剤を便器にかけトイレブラシで掃除して、そのあと便座の拭き掃除も、洗面台もダスターで拭き掃除をしました。気持ちがとてもすがすがしかった記憶がございます。

ふと、日常を考えたときに、例えば書類を片付けなければならない。掃除をしなければならない。付き合いの場に参加しなければならないと考えてしまうときがあります。

この「やらなければならない」思考はどこかにやらされている感があり、そうではなくて「やりたい」という意識に変えることが行動を主体的に導いてくれるのだと思いました。

そして、このやりたいという主体的な行動が人のブレーキに負けない原動力になるのだと思います。

そして、ロータリーと出会って、人との出会い、ロータリアン同士の出会いもそうで、実際、社会でも、人と人の出会いにおいて親睦を深めるためにも、まずファーストインプレッションが大事と言われています。

そこで、ファーストインプレッションについて先日ラジオで聞いたのですが、確かに準備やそのための知識を入れることも大事ですが、それよりも、初めて会うときにどれだけ初めてを意識して謙虚に会えるかが大事と言ってました。

その場面はすぐに過ぎ去ってしまいます。そして、二回目会うときはファーストインプレッションではなくなります。

なので、初めて会うときの印象がいかに大事かというのがファーストインプレッション（第一印象）。

例えば、国宝を見に行っても、最初から国宝としてみるのではなく、見て、感じてやっぱりすごいなぁと思えば国宝だというふうに見るのも一つというふうに。

美術の教科書で、モナ・リザの絵がいかに素晴らしいかと書いてあったとしても、ルーブル美術館で初めてみたときにそう思わなければ、それがその人にとってのファーストインプレッションなわけで、その感性が大事だというふうに思いました。

料理のさしすせそはありますが、褒め言葉のさしすせそってご存知でしょうか？あるそうです。

さ　→　さすがですね

し　→　しらなかったです。（知ってても）

す　→　すばらしい、すてきですね。

せ　→　センスがいいですね。（持っているのがいいバックとかではなくて、その人のセンスを褒める）

そ　→　そうなんですか。尊敬してます。そうくるか。

以前、泉谷さんが卓話でドローンの話をしていましたが、皆さん、そもそもドローンの使い方ってどんな使い方があると思われますでしょうか。

たとえば、上空から下を写真撮影したりもありますが、地上からでは進入しにくいとろに救援物資を運んだりもあります。また、戦争の兵器としてドローンを使うこともあったりもします。

でも、今日ご紹介したいのは、そんな使い方ではないんです。

牧場なんですが、普通乳牛とかを移動させたりして管理するのに牧羊犬を使ったりしますよね。そうではなくて、ドローンを使って乳牛の近くまで寄っていき、寝ている乳牛を一匹ずつお越しにいくそうなんですが、その映像が面白くてすごいんです。

ドローンが乳牛のそばまでくると今まで寝ていた牛がすくっと起きて、牛舎に向かって歩き出します。

これからも、ロータリーの親睦、奉仕を深めて参りたいと思いますので宜しくお願い致します。

それでは、卓話を終わりにしたいと思います。

本日は、ありがとうございました。